

エルサレムのサウロ

使徒言行録 Act9・26～31

2019. 2. 3

熊取教会

5 ²⁶ サウロはエルサレムに着き、弟子の仲間に加わろうとしたが、皆は彼を弟子だとは信じないで恐れた。²⁷ しかしバルナバは、サウロを連れて使徒たちのところへ案内し、サウロが旅の途中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって大胆に宣教した次第を説明した。²⁸ それで、サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の名によって恐れずに教えるようになった。²⁹ また、ギリシア語を話すユダヤ人と語り、議論もしたが、彼らはサウロを殺そうとねらっていた。³⁰ それを知った兄弟たちは、サウロを連れてカイサリアに下り、そこからタルソスへ出発させた。³¹ こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリア
10 の全地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えていった。

【はじめに】

使徒言行録は、教会が始まったときの物語です。私たちの教会をさかのぼってゆくと、使徒言行録に書かれている教会の姿にまで行き着きます。私たちが今こうして捧げている礼拝、こうして一緒に集まっている教会は、間違いなく、使徒言行録に描かれた教会のDNAを引き継いでいます。教会のDNAとは、例えば「主の祈り」であり、「使徒信条」です。イエス様のもとで唱え始められた主の祈り、それが今になお引き継がれている。私たちの源は使徒言行録の教会であり、使徒言行録は、わたしたちの教会を含む多くの教会にとっての創立物語です。物語そのものは必ずしも正確ではありません。しかし、その中に真実が含まれています。教会の発展が聖霊によって導かれたこと
15 ことです。その導きは今も尚続いています。教会の中に伝えられていた伝承に基づいて、ルカが語る物語。教会に次々と人が加えられ、大きな群れになってゆく。しばしば迫害が起こりました。迫害の度に天に旅立つ者たちがあり、諸国に散らされてゆく者たちがありました。その中で教会は成長し続けました。今日のテキストの最後の一節。

25 ³¹ こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えていった。

教会がパレスチナの各地に広がり、信者が増えて行った。教会は平和を保っていた。これが、今日の結論です。

ルカは、教会の発展の姿をこうして、出来事の間々に織り込んで、伝えてくれます。ある方は、これを、登山にたとえて言います。「険しい山道を辿って、高い山に登る。木々の間を夢中で上っていると、時々、見晴らしのよい尾根や峠に出る。登山者は、足下に広がる眺めを見て喜び、元気を
30 出し、更に次の山道を辿り始める。」そのような中休み、それが、「こうして、教会は・・・」と、出来事の合間にルカが時々織り込んである文章だ、と言っています。

【受洗の後】

35 さて、今日はサウロの回心の出来事のあと、彼がどのように行動したか。その事情については、今日のテキストと、パウロ自身が書いた手紙を比較したいと思います。

今日のところを見ると、サウロは洗礼を受けた後、そのままダマスコに滞在した。かなりの日数の後にダマスコを脱出して、エルサレムに帰った。エルサレムで使徒たちと知り合ったが、ユダヤ人たちから命を狙われていたので、故郷タルソに帰った、と記されています。ダマスコからエ

ルサレム。 エルサレムからタルソへと。

これに対し、パウロ自身が記したガラテヤ書は少し違います。新約聖書 343 頁。ガラテヤ 1 章 1 7 節から 24 節まで、 洗礼を受けたあと、サウロは、

5 「ガラテヤ 1:17 エルサレムに上って、わたしより先に使徒として召された人たちのもとに行くこともせず、アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのです。」

「アラビアに退いた」この期間が使徒言行録からは脱落しています。アラビア、は、今のアラビア半島のアラビアとは違い、死海の南東の荒れ野です。彼はだれにも話さないで、荒れ野に退いた。彼はそこで一人思いめぐらし、聖書を読み、祈ったのではないか。そして、ダマスコに帰ってきた。アラビアに退いていた日々は、彼独りのプライベートな経験であり、言行録の著者はこれを省いた

10

ガラ 1:18 それから三年後、ケファと知り合いになろうとしてエルサレムに上り、十五日間彼のもとに滞在しましたが、

エルサレムに戻ったのは、使徒言行録では、「かなりの日数が経って」とされていますが、パウロ自身は、3 年後だったと記しています。 エルサレムに帰ったサウロは、使徒のペトロに会い、そして、ガラ 1:19 ほかの使徒にはだれにも会わず、ただ主の兄弟ヤコブにだけ会いました。

15

これは、使徒言行録のように、教会に自由に出入りしたという印象ではありません。 サウロは密かに行動した。 そして、ガラテヤ書でパウロはこういいます。

ガラ 1:20 わたしがこのように書いていることは、神の御前で断言しますが、うそをついているのではありません。

20

もしかしたら、教会の中での言い伝えが、自分の経験と違うことをパウロは知っていたのかもしれませんが、それでわざわざ、「うそではない」と弁解したとすれば符合します。彼はエルサレムで、実際には、目立たないように行動した。彼の回心があまりにも急激で、そして、全く 180 度の回心であったがために、昔の仲間であったユダヤ教徒仲間にとっては、裏切り者。一方信徒達にとっては、迫害者。回心したとは言え、彼を畏れることは明らかでありましょう。だから、三年も経って

25

ガラ 1:21 その後、わたしはシリアおよびキリキアの地方へ行きました。

「キリキアの地方」というのは、サウロの故郷タルソがあるところですから、エルサレムからタルソに退いた点は、使徒言行録と合致しています。

これだけのことを前提に、使徒言行録の記事に従って少し詳しく見てみたいとおもいます。

35

【ダマスコ脱出】

先週の宿題としていた 23 節から始めます。ダマスコ脱出の出来事。

使徒 9:23 かなりの日数がたって、ユダヤ人はサウロを殺そうとたくらんだが、

ユダヤ人たちが、「イエスはメシア」である、と論証するサウロをそのままにできるはずがありません。まして、彼に説得されて弟子となる者たちが出てきたことから、やがて、「このまま放って

40

おけない」と、サウロ殺害をたくらむようになったのでありましょう。

24 この陰謀はサウロの知るところとなった。しかし、ユダヤ人は彼を殺そうと、昼も夜も町の門で見張っていた。

古代都市の多くは、敵から住民を守るために、町の周囲に城壁がめぐらしてあり、出入り口に門を設けて、夜間閉めていたようです。ですから、昼間、町への出入りを門のところで見張っていれば、いずれ捕まえることができると踏んだのでありましょう。ユダヤ人たちはサウロを見張っていました。

25 そこで、サウロの弟子たちは、夜の間に彼を連れ出し、籠に乗せて町の城壁づたいにつり降ろした。夜は門が閉ざされているので見張りがいない。そこで弟子たちがサウロを城壁伝いに籠で釣り下ろして、逃がしました。かなりの日数がたっていたとはいえ、このとき既に「サウロの弟子たち」がいたということに感心します。彼は城壁沿いに籠で釣り下ろしてもらって難をのがれた。この出来事も、パウロの手紙に記されています。第二コリント書 11章31～33節に、こう記されています。

ニコリ11:31 主イエスの父である神、永遠にほめたたえられるべき方は、わたしが偽りを言っていないことをご存じです。32 ダマスコでアレタ王の代官が、わたしを捕らえようとして、ダマスコの人たちの町を見張っていたとき、33 わたしは、窓から籠で城壁づたいにつり降ろされて、彼の手を逃れたのでした。

ここでは、アレタ王の代官が彼をとらえようとしたとあります。アレタ王というのは、死海の南東のアラビアの領主であり、当時はダマスコの領主も兼務していました。そのアレタ王から逮捕命令が出されていた。そのことを知って、おそらくユダヤ人たちもサウロを待ち構えて、機会があれば殺すつもりだったのでありましょう。ダマスコ脱出後、彼はエルサレムに向かいました。

【エルサレムにて】

26 サウロはエルサレムに着き、弟子の仲間に加わろうとしたが、皆は彼を弟子だとは信じないで恐れた。 ガラテヤ書に、自分はペトロと兄弟ヤコブとだけ会った、とありますが、他の弟子が皆避けたとことの結果かも知れません。教会に彼はやすやすと入れたはずがありません。たとえ、彼がエルサレムを出てから3年経っていたにしても、恐怖の記憶は消えなかったでありましょう。加害者は忘れても、被害者は覚えています。

【バルナバ】

27 しかしバルナバは、サウロを連れて使徒たちのところへ案内し、サウロが旅の途中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって大胆に宣教した次第を説明した。

「バルナバ」＝「慰めの子」、キプロス島生まれで、教会が始まったばかりのころ、持っていた土地を売って現金に換え、教会にささげた人です。教会の重要なメンバーであった彼は、後に、パウロ、つまりサウロと一緒に伝道旅行に行っています。ですから、彼がサウロと使徒たちとを橋渡しした、と言うのであれば納得できます。

28 それで、サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の名によって恐れずに教えるようになった。 29 また、ギリシア語を話すユダヤ人と語り、議論もしたが、彼らはサウロを殺そうとねらっていた。 「ギリシア語を話すユダヤ人」とは、サウロの昔の仲間たちです。その人々がサウロを殺そうと狙っていたというのも、ごく自然な流れです。

30 それを知った兄弟たちは、サウロを連れてカイサリアに下り、そこからタルソスへ出発させた。

こうして、サウロ、後のパウロは、神の定めたときまで、故郷にとどまって、目立たない、密かで静かな生活を続けました。

³¹ こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えていった。

5 と、今日のテキストは閉じられています。迫害者たちの先頭に立って、教会を最も激しく迫害していたサウロが回心したのですから、迫害は止み、教会はしばらく平和を保ちました。「教会は平和を保ち」、次の発展に向けて静かに準備をしていました。

10 この後、教会への迫害が再び強まり、弟子たちの多くはパレスチナから離散して行きました。また、異邦人たちが教会に加わるようになりました。教会の地域拡大と多様化です。初めはペトロたちが、そしてその後、パウロが用いられて、異邦人への伝道が始まりました。その原動力として大きく用いられたパウロは、今日のテキストの終わりでは、まだ「サウロ」という名のまま、ひっそりと故郷タルソで過ごしていました。

【終わりに】

15 私たちの周りの出来事のひとつひとつは、偶然に支配されていることが沢山あります。しかし偶然のように見えたことや、意味を見出せなかったことが、つなぎ合わされて、あとからその深い意味が見えてくることがあります。 夜空の星々を見ると、それらは大空に意味なく散りばめられて見えます。しかし古代の旅人や船乗りたちは、それらを結び合わせて、オリオンを、カシオペアを、と描き出して、星々に意味を与えました。

20 そのように、教会の歴史の中におかれた一つ一つの出来事を結び合わせて、その後ろにある神の御心を使徒言行録の著者は見出しました。 星座の背後にはローマやギリシャの神話がおかれています。それは神話にすぎません。しかし現代天文学は、星々を動かす法則を見えています。使徒言行録の著者ルカは、そこに神話のようなただの物語ではなく、神の定めた教会発展の法則を見出しました。それを、「聖霊が教会を導いた」と一言で言うことができるでありましょう。神は私たち一人一人を導き、その人生の糸を互いに織りなして、物語としてくださいます。聖霊が私たちを導いて、私たちの教会の歴史を織り上げておられます。私たちの日々の生活を、神が生かして用いて下さることを信じて、今週も共に祈りと聖書の一週間を過ごしたいとおもいます。